

Reactor Physics Asia 2017 (RPHA2017)参加報告

東芝 ESS 木村礼

2017年8月24日～25日に中国・成都 Chengdu Minya Hotel にて Nuclear Power Institute of China (NPIC)主催で第2回の Reactor Physics Asia(RPHA2017)が開催された。本会議は日中韓の炉物理に携わる学生・若手を主な参加者とした会議で、日本からは小原教授(部会長, 東工大), 千葉准教授(北大)他10名が参加した。

プレナリーセッションでは日中韓から炉物理解析手法や炉心・原子炉システム設計解析例の紹介があり, 質疑も含めて活発な議論が行われていた。



図1 : 受付前での記念写真 (左から東工大・桑垣さん, 東工大・小原先生, 東芝 ESS・木村及び和田)

本会議では若手も **Session Chair** にアサインされており, 筆者を含め各国から何名かの若手が **Session Chair** を行った。ただし, 学生は **Session Chair** にアサインされて居ないため, 筆者としては学生に経験を積ませる意味でも積極的に学生を **Session Chair** にアサインすることを提言したい。また, 中国・韓国の学生が積極的に質疑を行っていたのに対し, 日本の学生からの質問があまり聞こえて来なかったことが印象深かった。日本の学生が中国・韓国の学生に対して決して炉物理の知識で劣っているわけでは無く, 発表内容の質は全体的には日本の学生の方が高かった為, なお一層質疑の少なさが際立った。

筆者の個人的な意見としては、日本の学生は英語を聞いて理解する事は出来るものの、英語で質疑するという一歩が踏み出せなかったのではないかと思う。中国・韓国の学生を振り返ると、たとえ流暢な英語でなくても自分の思った事はどんどん質問してくるハングリー精神があり、この点は是非日本の学生にも身に付けてほしい。

次回のRPHA2019は日本開催であるので、この機会を学生の成長の為に積極的に活用し、発表のみではなく **Session Chair** なども通じて国際会議で通用する英語力や度胸を養う機会にして貰えればと思う。



図2 : Session Chair を担当する W 氏

さて、成都の所在する四川省と言えば四川料理として麻婆豆腐や火鍋が有名である。今回、有志で地元の人が主に利用する火鍋レストランへ本場の火鍋を味わいに出掛けた（図3参照）。日本で食べる火鍋は主に唐辛子の辛みを感じるが、成都の火鍋は唐辛子が更に多く、それに加えて花椒の“麻味”が加わっている。この花椒の“麻味”は数分食べていると舌の感覚が無くなる程であった。また、麺に麺類を食べると辛みを吸った麺を食べる事になるため要注意である。



図3：地元の人が集う火鍋レストランでの食事風景。火鍋でしゃぶしゃぶをして手元のごま油に漬けて食べる

成都でもう一つ有名な物はパンダである。成都には中心部から車で30分ほどの位置に世界最大のパンダ研究センターがあり、繁殖技術やパンダの生態の研究が行われており、一般にも公開されている。成都に行く機会があれば立ち寄る事をお勧めする。



図4：保育器の中で保護されているパンダの子供。動きが可愛らしい。

今回の RPHA2017 では中国側の手厚いもてなしを受けたが、2019年の日本開催ではこれまでの流れに囚われることなく、是非会中身の充実した質実剛健な会議を目指して欲しい。特に、学生にとって貴重な経験を積むことが出来る場になる様、微力ながら協力出来ればと思う。